

シミュレーション領域管理の数式解説 (domain.cpp)

Open DEM Japan

2025年7月2日

本ファイルは粒子系シミュレーションにおける「箱 (Simulation Box)」のサイズ・形状・周期境界処理を司る。座標系として

$$\mathbf{r} = (x, y, z)^T, \quad \mathbf{r}_0 = (x_0, y_0, z_0)^T \quad (1)$$

を用い、 \mathbf{r}_0 は箱の“lo” (原点) である。

■箱行列 直方体箱では

$$H_{\text{orth}} = \begin{bmatrix} L_x & 0 & 0 \\ 0 & L_y & 0 \\ 0 & 0 & L_z \end{bmatrix}, \quad (2)$$

で長さ $L_\alpha = \text{boxhi}_\alpha - \text{boxlo}_\alpha$ が定義される。斜方 (triclinic) 箱では

$$H_{\text{tri}} = \begin{bmatrix} L_x & xy & xz \\ 0 & L_y & yz \\ 0 & 0 & L_z \end{bmatrix}, \quad (3)$$

とする。 $\{xy, xz, yz\}$ は傾斜量で、いずれも $|xy|, |xz|, |yz| < \frac{1}{2}L_\alpha$ が推奨される (数値安定性)。

■ラムダ座標 箱内部の点を無次元座標 $\boldsymbol{\lambda} = (\lambda_x, \lambda_y, \lambda_z)^T \in [0, 1]^3$ で表す。変換は

$$\mathbf{r} = H\boldsymbol{\lambda} + \mathbf{r}_0, \quad (4)$$

$$\boldsymbol{\lambda} = H^{-1}(\mathbf{r} - \mathbf{r}_0), \quad (5)$$

で双方向一意となる。式 (??) は `lamda2x()`、式 (??) は `x2lamda()` に対応する。行列逆数は

$$H^{-1} = \begin{bmatrix} 1/L_x & -xy/(L_x L_y) & (xyz - L_y xz)/(L_x L_y L_z) \\ 0 & 1/L_y & -yz/(L_y L_z) \\ 0 & 0 & 1/L_z \end{bmatrix}. \quad (6)$$

■周期境界条件 (PBC) 周期方向 α について、任意の点 \mathbf{r} を

$$r_\alpha \leftarrow r_\alpha - n_\alpha L_\alpha, \quad n_\alpha = \left\lfloor \frac{r_\alpha - x_{0\alpha}}{L_\alpha} \right\rfloor, \quad (7)$$

へ折り返す。 $n_\alpha \in \mathbb{Z}$ は「何度箱を跨いだか」を示し、`image` 変数に符号化される。斜方箱では x 成分が L_x, xy, xz に絡むため

$$\mathbf{r} \leftarrow \mathbf{r} - n_x \begin{bmatrix} L_x \\ 0 \\ 0 \end{bmatrix} - n_y \begin{bmatrix} xy \\ L_y \\ 0 \end{bmatrix} - n_z \begin{bmatrix} xz \\ yz \\ L_z \end{bmatrix}, \quad (8)$$

となる (`remap()` の本質)。

■最小画像法 2点 r_i, r_j の相対ベクトル $\delta = r_i - r_j$ を

$$|\delta_\alpha| > \frac{1}{2}L_\alpha \Rightarrow \delta_\alpha = \text{sgn}(\delta_\alpha)L_\alpha \quad (9)$$

で補正すれば、箱中心像が得られる (`minimum_image()`). 斜方箱では他成分にも傾斜 (xy, xz, yz) を加減する.

■画像最近接写像 点 r_j の周期像のうち、基準 r_i に最も近い $r_j^{(\text{img})}$ は

$$r_j^{(\text{img})} = r_i + \arg \min_{n \in \mathbb{Z}^3} \|r_j - r_i - Hn\|_2, \quad (10)$$

で定まる (`closest_image()`).

■縮退 (シュリンクラップ) 境界 非周期方向では粒子群の包絡を測り、箱を

$$x_{0\alpha} = \min_i r_{i\alpha} - \varepsilon L_\alpha, \quad x_{1\alpha} = \max_i r_{i\alpha} + \varepsilon L_\alpha, \quad (11)$$

へ更新する. $\varepsilon = \text{SMALL} = 10^{-4}$ がデフォルトである.

■半長さ判定量

$$L_\alpha^{(1/2)} = \frac{1}{2}L_\alpha, \quad \mathbf{L}^{(1/2)} = (L_x^{(1/2)}, L_y^{(1/2)}, L_z^{(1/2)}), \quad (12)$$

は頻繁に参照される (例: (??)). ビット演算による画像管理は数式表現を割愛する.

■サブドメイン分割 並列計算では

$$\text{sublo}_\alpha = x_{0\alpha} + L_\alpha s_\alpha^{(p)}, \quad \text{subhi}_\alpha = x_{0\alpha} + L_\alpha s_\alpha^{(p+1)}, \quad (13)$$

で MPI ランク p の部分箱を割り当てる. $s_\alpha^{(\cdot)}$ は `comm->xyz_split` が与える分割点で、式 (??) と同形式の λ -空間にも同様に適用される (`set_lambda_box()`).

■ピリアルと画像チェック 最長結合距離

$$\Delta_{\max} = B_{\max} c, \quad c \approx 1.1, \quad (14)$$

が箱半長より大きい場合、結合ペアが誤画像を参照する可能性があり、警告が発される (`box_too_small_check()`).

■まとめ 以上の数式は Domain クラス諸関数 `set_global_box()`, `pbk()`, `remap_near()`, `image_flip()` などの核心であり、箱幾何・周期境界・並列分割を一貫して扱うための座標変換体系を与える.